

⑥吐噶喇列島(鹿児島県十島村) 村内全小・中学校

島内外が連携して支える山海留学

鹿児島県十島村教育長 有村孝一



十島村：屋久島と奄美大島の間に点在する有人7島、無人5島の12の島々で構成され、南北約160kmにおよぶ「日本一長い村」。民俗的には、琉球文化と大和文化の接点と言われ、今なお独自の祭事・郷土芸能などが受け継がれている。

●学校存続のため始まった山海留学

「十島村山海留学制度」は、平成三年から島の方々の家にも子どもたちを受け入れていただく「里親制度」により、各島の学校存続に向けた対策の一つとして始まりました。

募集にあたっては、留学生本人および保護者に山海留学を希望する理由などを記載する「山海留学希望調書」を提出していただき、それをもとに手続きを進めていきます。

また、「里親履歴書」という受け入れに関する事前調書もあり、この二つの調書をもとに里親さんとの調整を図ります。その後、里親さんとの事前面談、留学先となる島の下見などを経て、実際の留学が始まります。

●各島の実態に合わせた山海留学制度の実現を

山海留学の運営は、教育委員会、保護者、学校が密に連携をとり、留学生の生活状況の把握など、互いに協力しながら子どもたちや里親さんに対してサポートを行っています。

また、年一回、山海留学関係者による意見交換会を開催し、山海留学制度に関する課題や留学生の受け入れに係る問題について話し合いをしています。同制度をより良くしていく取り組みとして、各島内で山海留学学生の支援委員会を立ち上げ、島の実態に合わせた山海留学の実現を目指しています。

●村の学校全体で行う特色のある行事

十島村独自の学校行事の一つに、村内の学校が連合で行



口之島へ入港するフェリーとしま。奥に中之島を望む。



修学旅行による村連合。船内でのランチタイム。

う修学旅行があります。一般的に修学旅行は、学校単位で行われています。しかし、村の連合として実施することで、各学校が各島に点在しているのではなく、島は遠えど十島村の小・中学校だという意識や、そこに通う児童・生徒は、みんな十島村の一員だという思いを、各島の子どもたちに

持たせたいという願いがあります。

また、各小・中学校をTV会議システムによってつなぐ合同授業も実施しています。毎月の「土曜授業」の際には、「トカラ集会」という全島朝会を行っており、各学校の子どもたちが持ち回りで担当（進行役）となり、十島村に関するクイズなど工夫を凝らした内容を交わっています。

このほか小・中学校の連合交流学習、中学校の連合職場体験学習なども特徴的な取り組みといえます。

● 村の発展に貢献する子どもたち

— 山海留学制度がスタートし、本年度で二六年目になりますが、時代の流れにともなう社会環境などの変化により、留学希望者についても変化がみられます。島の自然やのびのびとした風土の中で教育を受けたいとの思いだけでなく、学校に行きにくくなった子どもや、大人数での授業についていけない子どもたちの留学希望が出てきました。留学に対する保護者のニーズも変わりつつあるのではないかと思います。



各島の運動会は住民をあげて行われる。写真は平島小・中学校。

山海留学に来た子どもたちのなかには、親元を離れ里親さんのもとで留学を経験することで、学校に行けるようになったり、少人数での授業により学力の向上が見られるケースが見受けられます。山海留学を通してたくましく成長している子どもたちの姿は、留学前の面談時とは、

まるで別人のように感じられることもあります。山海留學生の存在は、極小規模校である島の小・中学校の子どもたちの精神的成長や、住民との交流によるコミュニケーションの活性化に寄与しています。地域行事への参加など、まさに活気のある島づくりの一員といえます。

また、山海留学を終え島を離れた後も、里親さんとの交流が続き、島に遊びに来てくれたり、十島村の成人式に参加してくれることもあります。将来結婚して子どもができれば、十島村に留学させたいという声も聞かれるなど、山

海留学は子どもたちの夢を育み郷土愛を育てるとともに、十島村全体の発展に多大な影響を与えています。

● 山海留学の継続に向けて

現在、里親として子どもたちを受け入れていただいている方々の高齢化により、里親の担い手が減少してきています。しかしながら、山海留学の希望の問い合わせは年々増加の傾向にあります。村としては、山海留学を希望してくださる方々に応えられるよう、そして村内小・中学校の存続のためにも、留學生の受け入れ先の確保を重要な課題の一つとして捉えています。

実際、留學生のための寄宿舎の整備も進めており、来年度から平島^{（たたら）}では管理人さんのもと新しい形での山海留学が始まる予定です。

今後も継続して留學生を受け入れ、学校・地域の活性化に努めていきたいと考えています。そして、ゆくゆくは山海留學生の十島村への定住にもつなげていけたらと願っています。

有村孝一（ありむら こういち）

十島村教育長。昭和50年鹿児島大学教育学部卒業、同年鹿児島県公立小学校教諭に。その後、タイ国バンコック日本人学校教諭、十島村教育委員会派遣社会教育主事、国立阿蘇青年の家専門職員、鹿児島市教育委員会指導主事、南さつま市教育委員会生涯学習課長などを歴任し、平成25年鹿児島市立紫原小学校長を定年退職。紫原幼稚園長を経て同26年より現職。

◆島の学校からみた離島留学◆

小宝島は、鹿児島市の南西約300kmの東シナ海に浮かぶ周囲約4kmの小島である。校歌に「アダンの花咲く常夏の」と歌われるように、常緑のガジュマルが生い茂り、海岸には天梅てんのうめが自生するなど、手つかずの美しい自然が残っている。昭和5年に十島村立宝島尋常小学校小宝島分教場として開校し、同54年に在籍児童0名となり閉校した悲しい歴史がある。しかし同63年、地域住民の願いが叶い児童数2名で、十島村立宝島小学校小宝島分校として9年ぶりに再開校を果たした。平成28年児童・生徒増のために分校が廃され、地域住民の積年の願いであった小宝島小・中学校が開校した。現在、総人口60名の島に、14名の児童・生徒がおり、うち5名を山海留學生が占める。

今年度、小宝島で受け入れた山海留學生は、愛知県出身の小6男児とその妹で小4女児の2名である。昨年、十島村の山海留學制度を知った保護者が「大自然の中で、心豊かな体験をさせたい」との思いで子どもに1日体験入学をさせ、小宝島での生活が気に入ったため、本年度から留學生となった。

大きな学校では、先生1人に児童が40人ほどだったが、小宝島では、先生1人に対して1～3人。「大きな学校は友だちもたくさんいて楽しかったけど、小宝島は同級生が少ないぶん、先生がじっくり、分かるまでとことん教えてくれる」と男児は話す。

先日の水泳学習は、サンゴ隆起でできた自然のプールにて行なった。潮の満ち引きによって、自然のプールに海水と一緒に黄色や青に彩られた熱帯魚も泳



母の日に、里親へカーネーションを贈る小宝島小・中学校の子どもたち。

ぎに来る。まるで水族館のような天然プールに子どもたちの歓声がこだまする。留學生の目が輝く瞬間である。

これまで小4の在籍はなかったが、女児の転入によって小3・4の複式学級となった。小3の児童は、女児1名だったので、これまでずっと先生と二人で学習を進めてきた。「歳の近い友だちがほしい。一緒に勉強したい」が彼女の願いであった。留學生の転入によって、一つ上のお姉さんができた。引っ込み思案の性格が、前向きな性格へと変わり、まるで姉妹のよう。登下校も一緒に笑顔が絶えない。

胸の中には、9年間も子どものいなかった島で、分校が廃され本校が設置されたことに感慨深いものがある。里親さんは「留學生のお陰で、私たちも元気を分けてもらっています」と語った。島の方々も「子どもたちの声が島中に響いて、賑やかになった」と話す。次年度、新1年生の入学予定が1名、翌々年にも1名の予定がある。学校教育、地域の活性化のためには、山海留學生の確保は必然である。今後も自治会長を中心とした山海留學支援委員会を活性化させ、島をあげて留學制度の維持を図っていきたい。

(十島村立小宝島小・中学校 校長 田畑浩和)